はじめに

40年以上にわたり私は、世界中で一連の紛争（コンフリクト）――日々の生活のレベルから地政学的なレベルに至るまで――に、調停者、助言者、そして当事者として関わってきた。この経験は世界中での紛争のトレーニングにも生かされた。本書は、そうした紛争トレーニングから得たものを書物として表現する試みであり、文字通り「日常の生活から地政学的なもの」にわたる40の事例を扱っている。

紛争には高級か低級かの区別は本来ありえない。紛争は、生まれながらにしてすべて平等であり、当事者がそれと共存できるように、トランセンド（「超越」すなわち「乗り越える」）とトランスフォーム（「転換」）をともなって、変容されていく同等の権利を有している。政治家や外交官の社会的地位が高いという理由で、彼らが扱う地政学的な紛争のレベルが特に高いというわけではない。すべての紛争が平等であるのは、すべての関係者にとってそれが死活的な意味をもつからである。単にゲームの勝敗が問題なのではなく、しばしば人間の基本的必要、すなわち、生存、福祉、自由、そして主体性を確保する闘いに紛争が関わっているのである。

本書を読むのに特別に高度な知識はいらない。要求されるのは、読者の少しばかりの作業である。紛争が定形化されたなら、本を閉じてみよう。そしてあなたなら何を助言するかをよく考えてみよう。あなたなら何を言うか、何を行うか。そうした上で読み進もう。標準的な練習問題は次のようだ。あなた自身でもう１つ事例を作成し、それについてとことん考えよ。

まず、これらの事例が調停の組織であるトランセンド（www.transcend.org）によって、世界各地での紛争トレーニングでどのように利用されてきたかを紹介しよう。１つの部屋に対話のための５つのテーブルが円形に置かれ、１テーブルには６人が割当てられている。コースのインストラクターがフリップチャートを立てて円の真ん中に立ち、全員が彼／彼女に向き合っている。イン

ストラクターが１つの紛争について、誰が当事者か、何が目標か、不両立性（「矛盾」）はどこにあるかを概説する。そしてすべてのテーブルに、あなたなら何を助言するかと問いかける。各テーブルから１人ずつ、全部で３人程を選んで問いかけるのもよい。

５分－10分－15分毎に区切った対話が行われる。各テーブルで発表者が指名される。多くの提案が発表され、書き出され、議論やコメントが行われる。世界の多くの場所で多くの言語によってこうしたトレーニングが行われてきた。さらに、トランセンド平和大学（TPU：Transcend Peace University）があり、オンラインでいくつかのコースを提供している（www.transcend.org/tpu）。ここでも参加者は対話のグループに分れ、大陸をまたいで対話を行い、結果をまとめる人を選び、その仕事は全員が持ち回りで行う。共通の基本テキストは『平和の探求』（*Searching for Peace,* London: Pluto Press, 2nd edition, 2002）と『平和的手段による平和』（*Peace by Peaceful Means,* London: Sage, 1998）である。少人数のグループだから、誰でも話す機会があり、１人で考える時よりも、より多くの経験や創造性に依拠することができる。

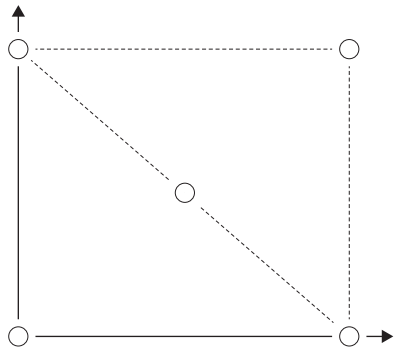
本書も、そうした勉強会のグループのテキストとして利用できよう。注意すべきは、本書のすべての事例を議論するにしても、グループ全員が１つのコンセンサスに達することや、著者と意見を同じくする必要は全くないということである。いずれにしても、きわめて多くのことを参加者は学ぶことができよう。

各章には１週間の曜日の名前が付いている。それによって１週間の現地研修のコースで何が行われるかの見当が大体つくようになっている。１人でも、サークルでも、ゼミでも、ともかく本書と７日間付き合ってみてほしい。本書は、あなたが何を読んできたかよりも、どれだけ生きてきたかに多く依拠し、アマチュアであれプロであれ、自分自身と自分以外の人々を助けるために、紛争ワーカーとしての基礎を読者に与えることを目的とする。すなわち、本書は基礎的な紛争学のための入門書である。

本書は、想像上の紛争ではなく、現実の紛争を扱っている。その大半は私が招かれて行った調停者としての経験に基づいている。月曜日は、個人の内部お

よび個人間の紛争を扱う（ミクロ）。火曜日は、社会内部の紛争を扱う（メゾ）。水曜日は、国家間や民族間の紛争を取り上げる（マクロ）。木曜日は、地域や文明間の紛争を対象とする（メガ）。ミクロ－メゾ－マクロ－メガを通して、最も身近な紛争から最も遠い紛争までをも読者は通覧できよう。金曜日と土曜日は、これら４つのレベルの紛争に共通する諸テーマを考察する。そして日曜日は、全体を概観した上で、結論を述べる。

それでは健闘を祈る。実り豊かな楽観的な思想を考え、豊かな夢を夢見られるように。本書を通じて現れ、あなたがそこから多くを読み取ることになる次のダイアグラムは、そうしたインスピレーションの源泉となるだろう。



京都／アルファズ
2001年４月／2004年１月
ヨハン・ガルトゥング

イントロダクション

読者のみなさん。まず、縦20センチ、横２センチの一枚の紙片と鉛筆を用意しよう。その一番上にＡと書き、そして一番下に、ただしこんどは裏側に、Ｂと書こう。そして何回も、最後には実感がわくまで、２つの願いを唱えてみよう。

「ＡからＢに線を引きたい。その線は直線でなくても良い。」

「この線は、紙の端を乗り越えないようにしたい。」

この問題は、２つの目標とその間の矛盾という形をとっている。さあ、実際に線を引いてみよう。両端を合わせてドーナツ型にしても、ＡとＢは依然として反対側にあるから、線は端を乗り越えてしまう。端を乗り越えないようにすれば、ＡからＢに達することはできない。さて、どうするか。そこであなたは妥協を試みるかもしれない。Ａからほとんど端の近くまで行き、紙を裏返して、ほとんど端の近くからＢに行こうとするかもしれない。しかしこの場合、線がつながっていないから、これはごまかしである。いろいろ試みたあげく、あなたは腹を立て、線を引くのを止めてしまうか（インドのように）、ついには本書のような平和に関する書物に爆撃を加え始めるかもしれない（米国のように）。あるいは、この頁を無視し、尊大だと、私を非難し始めるかもしれない（ノルウェーのように）。要するに、あきらめるということだ。しかし、あなたがこれまで、「メービウスの帯」について聞いたことがなくとも、紛争ワーカーに誰よりも求められる必要な資質である想像力と創造力を持たなくとも、ねばり強く考えよう。両端を合わせる前に一ひねり（ツイスト）し、紙片の一端を半回転させてみよう。すると今度は、ＡとＢは同じ側にある。事実として、すべてのものが同じ側にある。矛盾はトランセンドされ、もうそこにはない。ここで、一ひねりが大切である。一ひねりすれば、ドーナツはトランスフォーム（転換）され、問題は解決されたのである。

この例は紛争ではない！と、あなたは言うかもしれない。しかし、紛争の基本的な要素がここにはある。すなわち、矛盾がある。想像してみよう。第１の

あなたは、「端を乗り越えてしまおう」と言う。第２のあなたは、「線がつながることはそれほど重要ではない」と言うだろう。第３のあなたは、「妥協がすべてだ」と言うかもしれない。第４のあなたは、「考えるに値しない。われわれには他にもっと重要な問題がある」と言い始めるに相違ない。挑戦を回避するのに、このような４つの言い訳がつねに存在する。しかし第５のあなたは、アウグスト・メービウス（「メービウスの帯」は彼の名をとって命名された）とともに、トランセンド（超越）の主眼点すなわち「どちらをも」（*both/and*）について探求しようと言うだろう。もちろん、「一ひねり」に関しても。

そこでわれわれは本書の眼目に到達することになる。それは単純ではあるが、議論の進行とともにだんだん複雑になっていく。重要なことは、根本にある思想を把握することであって、解決策を直ちに「見つける」ことではない。

しかし、まずは紛争における目標と当事者についていくらか述べることにしよう。目標は積極的なものもあれば消極的なもの、追求すべきものもあれば避けるべきものもある。目標と生命――生き物、人間と動物、植物と微生物、あなたと私――とは切り離すことができない。ただ生命をもつものだけが目標をもっている。目標をもたなくなると、生命は終わる。死ぬ人間がもつ最後の目標の１つは、無目標そのもの、永遠の安らぎであろう。目標はわれわれを苦しめる。目標を達成し、満足するためにわれわれが始める活動には限りがない。

目標のあるところ、しばしば矛盾がある。矛盾は、同じ有機体の中でのこともあれば、有機体間でのこともある。今とここの間の矛盾もあれば、ここととあそこ、今とこれからの間の矛盾もある。「矛盾のない人間がいる。それは死体と呼ばれる」と中国人は言う。生命と目標と矛盾は切り離すことができない。紛争を避けるための「紛争予防」は無意味である。しかし、暴力を避けるための「暴力予防」は、意味があるばかりでなくきわめて有益である。本書はそのために少しでも寄与したいと考えている。

もしわれわれが、山は上昇を目標としていると言えば、われわれはその山に生命を付与することになる。「オスロ」あるいは「ノルウェー」は目標をもとうとしないから、それは組織ではあっても有機体ではない。しかし、市長や首相や企業の社長は、目標をもとうとするであろう。したがって彼らは生命をも

つ。

個人やグループが、都市や国家の目標に関して自らの立場を表明する時、彼らはしばしば「利益／権益」（interests）という言葉を用いる。そうすることによって、それは目標のカタログから無作為に選ばれたものではなく、組織の土台に深く根付いた何ものかであることを彼らは示唆している。

しかし、利益／権益という言葉は、指導者がもつ目標をひどく隠蔽する定式化であることがしばしばである。例えば、国あるいは町あるいは組織が大きくかつ強くなるべきだといった目標である。おそらく彼らは利益／権益という言葉を使うことが彼ら自身を大きく強くすると考えているに違いない。

いくつかの目標は他よりも優先される。それらは個別の有機体の持続的な生命にとって絶対的かつ必要な条件だからだ。もし条件が満たされなければ、生命や人間的尊厳は可能ではなくなる。生存－福祉－自由－主体性が、基本的な必要である。それは価値よりも深く、価値よりも上位に位置する。価値はわれわれが選択できる。価値の選択はわれわれの自由の一部である。価値はわれわれの主体性の一部になる。まさに価値をもつことそれ自体が、価値づけられているのだ。しかし、基本的必要はそれとは異なる。あなたは基本的必要を選ぶことはできない。基本的必要が、あなたを選ぶのである。それらを満たすことが、あなたという存在を可能にするのである。もしあなたが、あなたあるいは他者の基本的必要を不要なものと考えるとすれば、あなたはあなた自身のあるいは他者の生命を人間に値しないものと宣告しているのである。その場合、あなたは暴力を行使している。目標や価値に関して交渉は可能である。しかし基本的必要に関しては可能ではない。基本的必要は尊重されるべきものであって、交渉次第というものでは全くない。

ある意味では、基本的必要の充足は、「営利組織」である「ノルウェー」にも「オスロ」にも、唯一の正統的（legitimate）かつ正当な（valid）利益である。権力やその大きさなどの他の「利益／権益」は、必ずしも基本的必要を充足する手段にはならない。われわれが要求するものは、基本的必要を侵害するな、ということである。もしそうした侵害があれば、それは深刻な問題になる。基本的必要の侵害こそ、暴力にほかならない。

基本的必要は、あなたとあなたの環境の関係を調整する。環境とは、人間の身体（body）のもつ８つの窓（皮膚もお忘れなく！）を通して出入りするものである。誰がコントロールするのだろう。あなたか、他の誰かだろうか。そして、これは身体の問題だけではなく、心（soul）の問題でもある。心は、受容された印象や情動の倉庫であり、様々の表現となって時々解放される。

そして魂（spirit）がある。魂とは、身体と心との結合がどのように深くプログラム化されているかを考察し、そのプログラムを変更する能力のことである。われわれは、こうした能力が動物や植物や微生物に備わっているとは思わない。それらにあっては、「本能」（instincts）によって目的への指向があらかじめプログラム化されている。しかし、基本的必要が不要なのではない。われわれは、利用しさらには絶滅させることによって、動物や植物の基本的必要を侵害しているのだ。調和すなわち基本的必要を相互に充足することは、ペットの場合にしかわれわれは行いえていない。

具体的な例示を通してわれわれは紛争の概念や理論に導かれる。まず、個人の内部の紛争（葛藤）や個人間の紛争（争い）から始めよう。あなたは、これと同じ方法が、ジェンダーや階級や人種のような集団間にも適用されることを認識されるであろう。さらに、国家や民族間、地域や文明間の紛争にも関心をもっていただきたい。メディアで、国家間や企業間のゲームとしてそうした紛争が報道されるのを、あなたは読んだり、聞いたり、見たりされているであろう。しかし紛争はあなたと、そしてすべての読者や視聴者と関わっているのである。あなたの関心と知識とを民主主義は必要としている。これが、死と悲惨、国家と企業の権力ゲームに対抗して行われている、われわれの時代における大規模な民衆の反乱、平和運動、それにポルト・アレグレの運動からのメッセージである。何百万もの人々の基本的必要を不要なものとみなす者にとって、これらの運動は大きな脅威である。今日では、国家／資本と普通の人々との間の矛盾はグローバル化され、地域間や文明間のメガレベルの矛盾として演じられている。

紛争の中心点をしっかりと把握しよう。充足しえない目標が存在する。それらは実現を阻止されている。換言すれば、そこには欲求不満がある。そのこと

自体十分に悪い。しかし紛争はもう一歩先に行く。少なくとも２つの目標がある。１つの目標がもう１つの目標の達成を阻止している。もう１つの目標は「他者」の手中にある。目標に対する関係は「他者」との関係に転化する。他者とはわれわれ自身の一部分でさえあるかもしれない。この場合、われわれはそれを葛藤として語る。ゲーテの言うように、「私の胸には２つの魂が宿っている」。あるフランス人が切り返して曰く、「なぜ、２つだけ？」と。

そうした関係性は、憎悪から無関心に至る様々な強い感情で直ちに満たされるであろう。目標が放棄されたり、人が単に回避したりする場合には、自分の裏切りに対する侮蔑の念で苛まれるであろう。腹の脳は、下痢や嘔吐をもよおし、めまいをさせ、はらわたを煮えたぎらせる。あなたは沸騰し、暴発寸前である。愛する人をやさしく抱き寄せるあなたの手が、拳に変わる。あなたは真青になる。受容可能かつ維持可能な持続する解決に向かって、大量の事実および目標を処理・加工するために、頭の脳が一番必要とされるまさにそのとき、その頭脳は切り離されてしまう。

紛争はわれわれの中のすべての感情と思考に触れている。紛争は、われわれが提供すべきものすべてをわれわれに要求している。それに応えなければ、情動が暴力としてたやすく表現されるであろう。言葉の暴力、物理的な暴力、あるいはその両者が、他者の基本的必要を侵害する。

本書では、実生活から採った40の事例が探求される。まずは、古き良きオレンジの事例から始めよう（「テーブルの上に１つのオレンジを置き、そこに２人の子供が座ります。さて、何が起きるでしょうか？」初級コースのトランセンド・ワークショップは、参加者にこう問うことから始まる――訳者）。私が１つの寓話として書き、アンドレアス・ガルトゥングが挿絵を描いた絵本『空飛ぶオレンジのお話』（*A flying orange tells its tale*）が出版されている。

私はかつて、ロンドンで開かれた子供、両親、先生間のいじめに関する会議でこの例を使った。10個のテーブルがあり、１テーブルに２人がつき、テーブルの上に１個のオレンジが置かれた。一番年少の子供から始め、徐々に年長者に移ることにし、彼／彼女らが「状況」をどのように見るかを観察した。「紛争」という言葉の使用は意図的に避けた。最初に発言したのは８歳の女の子

で、その年のその学年の英国中で一番良くできる生徒だった。「私はオレンジの皮をむくでしょう」と彼女は言った。「そして袋の数を数えます。もし偶数だったら私はオレンジを２つに分割します。そうすれば彼はどちらかを選ぶことができます。もし奇数であれば、私はやはり２つに分割します。そして残る１袋を２つに注意深く分割します」。

全く正解だ。しかしナイフで分割したがる人たち――ふつう男性であり、女性は皮をむく方を好むようだ――と同じく非創造的である。オレンジを絞ってジュースにし、グラスに等分するという人たちもいる。数学や物理や化学を教えるのに恰好の教材だ。

そしてコインを放り投げようとする人たちもいる。また別の人たちは、「私はそのオレンジを買うことにする」と言う。少年は相手と闘ってオレンジを手に入れると言う。しかしそれは間違った回答だ。両者に受容可能であり、将来に向かって持続可能であり、後から報復がない結果をわれわれは望むのである。

しばらくすると、より創造的な提案が出てくる。何人かの子供は、オレンジで遊ぶことを欲した。インドの２人の少女は、オレンジはとても美しいから、見ているだけで十分だと考え、「一緒に見ることは、すでに分け合っていることだ」と言う。オレンジの皮でカップを作ったり、皮でケーキを作ったり、それを売ったり、オークションにかけたり、くじ引きにしたりする。そして最後には、種子を撒き、20年後に果実を刈り取るという人たちも現れる。少なくとも16個の質的に異なる結果が考えられる。しかし、ほとんどの人は、せいぜい６ないし７個しか思いつかない。

解決の幅が広ければ広いほど、暴力に対する代替案がそれだけ多く考えられる。紛争が暴力の局面に入っていくのを回避するための、ここが勘所である。紛争のエネルギーを、創造的な解決策の案出に向かって活用するのである。